法華堂（重文）

智顗が『摩訶止観』で説いた四種三昧の一つ、「半行半座三昧」の修行のための道場。これは、２１日間にわたって、五体投地による礼拝と懺悔、道内を歩き続けて法華経を読誦すること、そして坐禅を続けることで、仏の智慧をさずかる修行である。法華堂の本尊は瞑想と修行を司る普賢菩薩。

最澄は『山家学生式』において、天台宗の僧侶には十二年間山に住まわせて、止観業（天台法華）か遮那業（真言密教）のいずれかを学ばせると定めた。四種三昧は止観業を学ぶ僧にとって最も基本となる四種類の修行である。最澄は四種それぞれを行じるための四つの堂の建立を構想したが、生前に完成したのは東塔地区の法華三昧院のみであった。最澄の死後、円仁をはじめとする弟子たちが最澄の意志を次いで延暦寺の３つの地区それぞれに法華三昧堂を建立したが、現在は西塔地区にのみ残っている。